

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫



◆◆◆ No.0155 ◆◆◆

11/12/21

【 2 年連続で「株高、円安」見通しが優勢 】

今年も営業日ベースでは残り 2 週間を切るなか、外資系を中心に主要な金融機関やシンクタンクなどから来年の金融市場についての見通しが相次ぎ発表されている。それらを見ると、来年の干支である「辰年」について株式市場では半ば期待感を込めて強気見通しが少なくないようだ。また、為替に関しても短期はともかく、一年を通して言えば円安気味に推移するとの見通しが優勢となっている。もちろん、どのレベルまで戻すのかという問題はあるものの、日本経済にとっての 2 大悪材料である「株安・円高」一が仮に和らぐのであれば、企業にとっては恵みの雨、業績や消費マインドの回復に向けてかなりの追い風となる可能性もある。

◎ドル/円の上値予想は 90-95 円との見方が有力か

金融機関やシンクタンクから出されたレポートのほか、年末に向けた忘年会などを含め筆者が自身で収集した情報を総合すると来年の見通しについて、マーケットでは強気の見通しをする向きが少なくない。確かに来年の干支である「辰年(たつとし)」は、翌年の「巳年(みどし)」と併せて強気の推移することで知られ、実際に『辰巳天井』一という言葉もあるほどだ。また、ある株式アナリストの分析では「辰年」は十二支で一番の上昇を記録しており、平均上昇率は 25%を超えとも言われている。分析だけを聞けば先行する格好で期待感が大きく膨らむことになりそうだが、果たして実際のところはどうか。

そんな株式相場の見通しに対して為替はというと、やはり(ドル/円)の強気予想が少なくない。ヒアリングした限り、理由については大きく 2 つに分けられそう。具体的には「ユーロの最弱状態は続き、結果としてドルは対円でも買われる」といった見方と、過去の経験則を踏まえた「テクニカル的な分析」を背景にする向きがほとんど。後者の「テクニカル的な分析」については、筆者もバックナンバーで何度かレポートしているので、是非とも参考にさせていただきたい。

また、そのほかでは確たる報道はされていないが、2005 年に米国が一年限りの時限立法として導入した「本国投資法」を導入する可能性が取り沙汰されていることの期待も込めて、ドル高の支援要因として挙げる方もうかがえた。

ちなみに、レベル的な話をすると、懇談ベースでの予想になるが、もっとも強気な見通しをされていた方には 100 円以上の声もあったが、やはり来年だけでは 90-95 円程度をドルの上値メドと考える方が大勢だ。これは、ある意味で当然で、何故なら仮に本稿執筆時のレートである 78 円程度で今年一年が終了したとすれば、来年中に 100 円へと到達するにはドルは 22 円ものドル高・円安進行、率に換算すると 30%近い上昇が必要になる。当レターでも何度かレポートしている「年間変動率」などを参考にすれば「ありえない」とまでは言わないまでも、限りなく不可能に近い。もっとも、上値を 90 円としたケースでもドルの上昇率は年初を起点に 15%を超える計算で、年間の平均変動率が 17-18%に留まっていることからすれば、実際のところはヒョッとするとそれすら難しいのかも知れない。

一方で、振り返ってみると昨年末は「日本株高」「ドル/円上昇」の見通しが優勢だったにもかかわらず、周知のように今年の金融市場は「日本株安」「ドル/円下落」と正反対の展開をたどっている。つまり、実勢相場は多くの「プロ」が予想した方向と逆に動いたわけだ。

いわゆる相場格言にひとつに『人の行く裏に道あり花の山』というものがあるけれど、付和雷同でみんなに同調することなく、大方が支持する強気見通しとは裏腹の戦術が意外に功を奏する可能性もありそう。 (了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

